

秋田県大仙市

ふ ど き しょう

# おおた風土記抄

～私達の祖先をたずねて～

- ・「風土記」とは、風土・産物・文化を記したものです。
- ・「抄」とは、抜き書きの意味です。



太田に残された260年前（江戸時代）の山の絵図

はじめに

このパンフレットは「子供に太田の歴史を学ばせたいけど…」というあるお母さんの言葉から生まれたものです。太田地域には『太田町史』という分厚い本があります。しかし子供達を読みこなすには根気のいるなかなか難しい本でしょう。

そこで「おおた風土記抄」として、太田の歴史の出来事を一つひとつ紹介するのではなく、私達の祖先は誰か？と言った疑問や太田に人びとが数千年にわたり住み続けた理由を、太田に残された歴史資料を手掛かりに考えてみました。地域の歴史と文化は“人びとの営み”の上に成り立つと言え、その営みを理解することは地域の成り立ちを知ることと言えます。

このパンフレットをきっかけにして、ふるさとの歴史と文化に興味を持っていただけたならと願うばかりです。



ナビゲータのあか松の  
“ぼったん”です。  
よろしくお願いします！

…“ぼったん”はあか松林の原野を開墾して美田に変えた、祖先達のフロンティア精神の象徴として生まれました。



ぼったん  
プロフィール

中に二次元バーコードがあるよ。  
スマホで読み取ってみよう。



# 人びとはいつ頃から太田に住み始めたんだろう？

大台山から西を望む



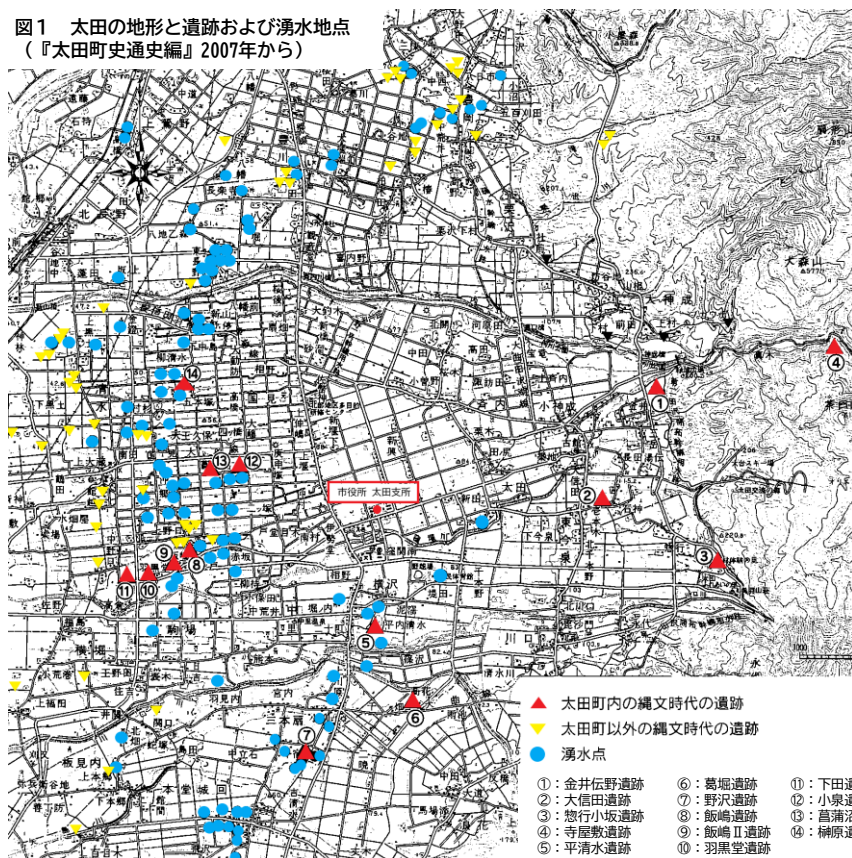
5月上旬、田んぼに水が入ると“仙北湖”が生まれます。こんな美しい田園の中に私達は住んでいます。

はっきりしたことはまだわかっていませんが、約5500年前（縄文時代前期後葉）には太田で人びとが暮らし始めたようです。その人びとは、いわゆる縄文人と呼ばれる人びとで、縄文時代は1万年も続きました。

太田には縄文遺跡が14か所ありますが、周辺の地域と比べると遺跡数は少ないと言えます。その理由として図1を見ると湧水地点の周りに縄文遺跡が多く見られるように、太田の地形の大部分は扇状地の中央に位置し、湧水地点の少ないことがその原因かもしれません。湧水地点は多くの場合、扇状地（太田では齊内川・川口川が砂礫を平地に流し扇型に広がった地形）の扇端部で水が湧き出ます。太田では標高40～60mのあたりです。このように縄文人は水や食糧の確保しやすい場所を選んで定住したようです。ただ、金井伝野遺跡（図1-①）のように湧水はなくとも齊内川の日あたりのよい南側の段丘上を選び、約5000年前から約3200年前まで（縄文時代中期前半から晩期中葉）の1800年にわたり人びとが住み続けた場所もありました。

いずれにしても、縄文人も私達と同じく住みやすい場所を選んで定住していたと言えます。このことは、太田の歴史を考える上でとても大切な視点です。

図1 太田の地形と遺跡および湧水地点  
（『太田町史通史編』2007年から）

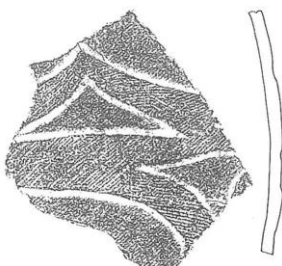


金井伝野遺跡出土土器拓本



土器断面図です。下の晩期中葉の断面図と比べると分厚いですね。

縄文時代中期前半 約5000年前



縄文時代晩期中葉 約3200年前

0 10(cm)

過去 5000年前 現在  
クフ王のピラミッド (4600年前)



## 私達の祖先は誰なんだろう？

### 写真1

弘田柵跡の外柵南門（1997年復元）です。弘田柵跡はエミシ支配のため1200年前に造られました。



縄文文化について



弘田柵跡について



日本列島の文化は2500年前頃までは縄文文化としてとらえることができますが、それ以降は、<sup>のうこう</sup>農耕を中心とした<sup>やよい</sup>弥生文化が本州に広がり、列島文化は大きく三つに分かれると言われてます。まず<sup>ほっかいどう</sup>北海道を中心とした「北の文化」、次に本州の「中の文化」、そして<sup>りゅうきゅうしゅう</sup>琉球諸島周辺の「南の文化」です。それぞれの文化の境界が交わる地域には「ぼかしの地域」がありました。

「北の文化」と「中の文化」の「ぼかしの地域」は現在の東北北部から<sup>おしま</sup>北海道の渡嶋半島、「中の文化」と「南の文化」の「ぼかしの地域」は九州南部と<sup>さつなん</sup>薩南諸島（種子島等）でした。「北のぼかしの地域」には<sup>あま</sup>蝦夷と呼ばれた人々が、「南のぼかしの地域」には<sup>あま</sup>隼人と呼ばれた人びとがそれぞれ暮らしていました。蝦夷・隼人の呼称は「中の文化」（大和朝廷）の人びとが名付けたものです。

さて、太田の地は「北のぼかしの地域」に位置します。この地域の特徴は「北の文化」の<sup>すくじょうもんぶんか</sup>縄文文化を基本の文化として「中の文化」の影響を受けた多様な人びとが暮らしていました。1300年前、「中の文化」に強力な古代国家（<sup>りつりょうこく</sup>律令国家）が誕生します。この国家は「北の文化」と「南の文化」の地域を「中の文化」に取り込もうとします。現在の仙北地域にある弘田柵跡は<sup>あま</sup>蝦夷支配のために律令国家によって造られたものです。蝦夷支配の基本姿勢は、<sup>しやうさく</sup>軍事力を背景とした城柵造営と移民政策でした。私達が住む周辺にも、現在の関東地方や北陸地方から2000人もの人びとが、移民として送り込まれた記録もあります。

このように私達の祖先は「北のぼかしの地域」に住み、「中の文化」と「北の文化」とも違う歴史を歩み続け、多様なヒトとモノが行き交う地域で暮らしていた人びととすることができます。



## なぞ多き時代～弥生時代から戦国時代～



後三年合戦について



太田城破却について

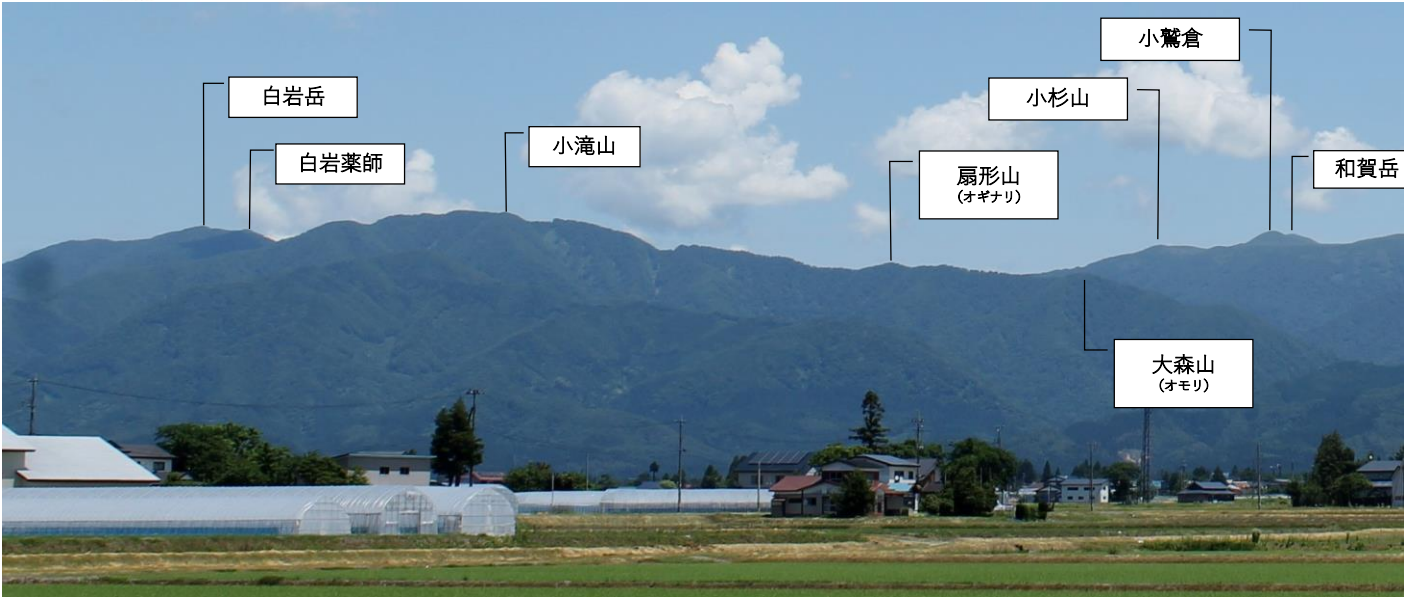
<sup>じょうもん</sup>縄文時代の太田の地に人びとの暮らしがあったことは確かですが、<sup>やよい</sup>弥生時代から<sup>せんごく</sup>戦国時代までの約2000年間、人びとが暮らした跡は断片的にしか残されていません。ただ弘田柵跡やその周辺には<sup>へいあん</sup>平安時代以降の住居跡などが見られますので、おそらく太田の地にも人びとの営みはあったことでしょう。

例えば、<sup>ごさんねんかっせん</sup>後三年合戦（940年前）の際に<sup>みなもと</sup>源義家が現在の<sup>いわてけん</sup>岩手県側から<sup>おうりやん</sup>奥羽山脈を越え<sup>まぎ</sup>真木地区を通ったという伝承が残されており、その際に義家が逗留したと伝わる<sup>げんたじ</sup>源太寺跡も残されています。この源太寺は江戸時代には源氏である<sup>けんし</sup>佐竹氏と縁があるとのことで<sup>かくかん</sup>角館へ移転しました。また<sup>かまくら</sup>鎌倉幕府が作成した「<sup>おおたぶん</sup>大田文」（<sup>しやうえん</sup>荘園の名前・田面積・領主などを記したもの）に<sup>ながした</sup>長信田という地名が記録されています。さらに戦国時代になると、1590（<sup>てんしょう</sup>天正18）年に<sup>とよひでよし</sup>豊臣秀吉の命令によって破却された太田城などの城館跡が山沿いに見られます。

このように、数千年にわたり太田の地に人びとの暮らしがあったと言えます。



山のめぐみは人びとの暮らしを豊かにしたよ。



三本扇地区低下川原付近から東山を望む ※東山（ひがしやま）…地元では奥羽山脈を言う。

つい100年前まで、人びとは自分達が住む周辺の山・川そして海から採れる産物を衣食住の資源として利用してきました。例えば、山からは食糧（山菜、キジ・ウサギの肉など）や煮炊きするための燃料（薪・炭）と鉱物（金・銀・銅・鉄など）を、川からは飲料水や農業用水、そして魚などをそれぞれ得ていました。人びとが縄文時代から数千年にわたり太田の地を選び続けた理由は、暮らしを支える豊かな自然環境があったからと言えます。

写真2「宝暦12年太田村今泉村書込山絵図」は、260年前に現在の真木地区から惣行地区にかけての山々とその利用について記された絵図です。絵図には山のふもとの村々の神社や堤などの位置までが記されています。この絵図は、太田村と今泉村が秋田藩の林役人に提出したものです。山の利用については、秋田藩が管理する山林（スギ・ヒノキ）があったため、藩と村々が利用範囲について確認したものです。

写真3「仙北郡今泉村打直郷絵図」は、今泉村が土地調査を行った結果を村境の太田村、川口村、横沢村に認めてもらうため作成した絵図です。絵図は大台山周辺のもので、暮らしに必要な沢水や堤が記されています。



写真2 宝暦12年太田村今泉村書込山絵図  
作成年：1762年、寸法：タテ79.2×ヨコ99.6 (cm)、個人蔵  
（『大仙市太田近世・近代絵図集』2007年から）

絵図完成 (260年前)

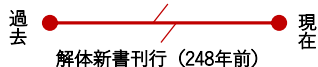
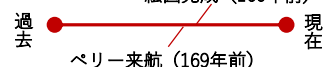


写真3 文久3年仙北郡今泉村打直郷絵図（一部）  
作成年：1863年、寸法：タテ105.4×ヨコ83.4 (cm)、個人蔵  
（『大仙市太田近世・近代絵図集』2007年から）

絵図完成 (160年前)



**燃料の確保**

薪・炭は生活の必需品であった。



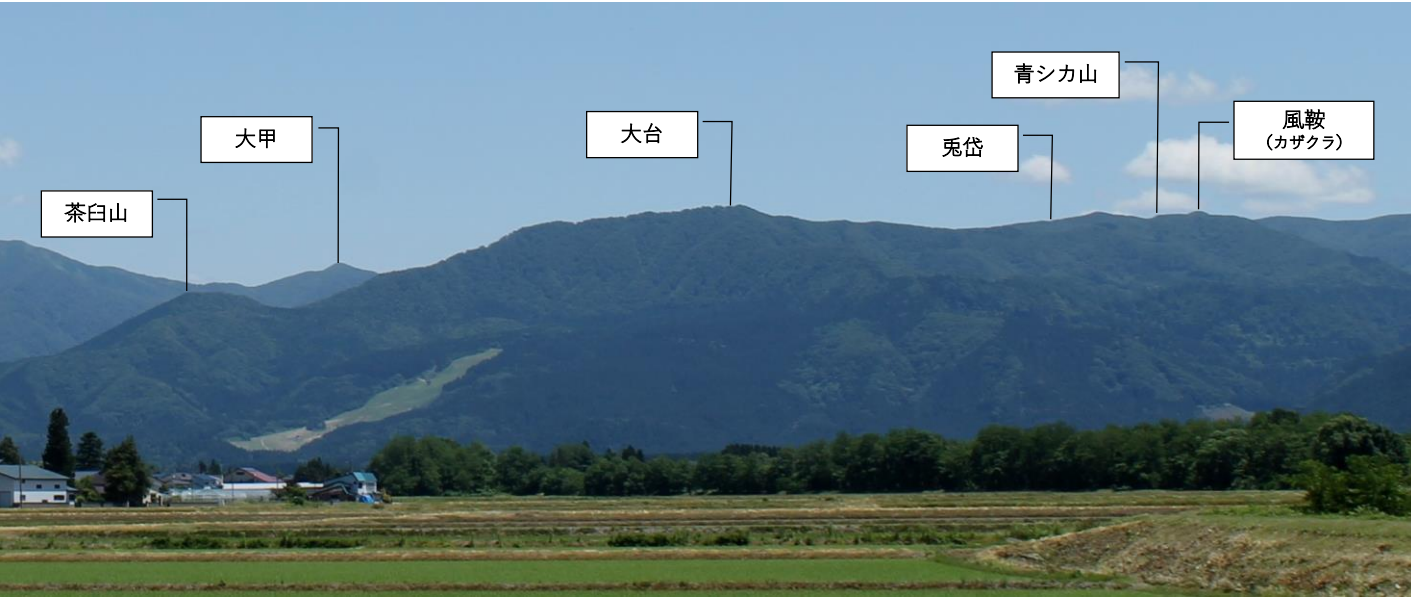
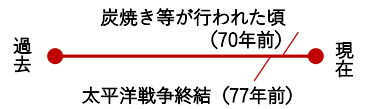
**←炭小屋**

炭作りは貴重な現金収入にもなった。



**←釜木流し**

山中で薪木を作り下流にながし、運搬の労を軽減した。



このように、山は村々の暮らしのための共同利用の場であったことから、その取り決めはとても複雑で一つの村だけで決められるものではありませんでした。要するに、山の資源は人びとが生活する上で欠かすことのできない貴重なものであったのです。

また図2には山や沢の名前が記されています。薬師岳・大甲・大台などの山名は聞いたことがあるかもしれませんが、ニッピャ沢・カトマツツル・歌之助などの地名は聞いたことが無いかもしれません。山にも地名がある—祖先達がそれだけ山を利用していた証し、と言えましょう。

図2 山岳部の地名  
(『太田町史地誌編』2007年から一部修正)



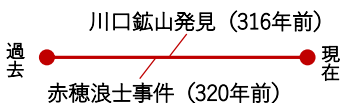
太田にも鉱山があったよ  
～川口鉱山跡～



鉱山事務所 (1920年代)



川口鉱山について



1866年(慶応2)川口鉱山絵図(仮題) 寸法:タテ90.5×ヨコ23.8 (cm)、個人蔵  
(『大仙市太田近世・近代絵図集』2007年から)



祖先達の努力と平和な時代が太田の美田を生んだんだよ。



東山から西を望む (2005年空撮)



太田支所付近から東山を望む (2005年空撮)

1985 (昭和60) 年、太田町合併30年を記念し「太田町民歌」が制定されました。その歌詞には「先駆の偉業 拓きし道に 疏水の流れつらなる美田 希望にもえる 豊けき太田」とあり、太田のあか松林の原野を開墾し美田に変えた祖先達の功績が讃えられています。2022年現在、太田の美田は2500ha (2500町歩) に広がり、戸別あたりの耕作面積は大潟村に次ぐ県内2番目の大きさになっています。

太田では、江戸時代以前から沢水や湧水を利用した稲作が行われていましたが、江戸時代以後の稲作と比べると小規模なものでした。ではなぜ江戸時代に入ると稲作が盛んになったのでしょうか。それは、江戸時代には“米”が貢租 (年貢) や流通など経済活動の基本となる農作物として扱われたからです。そのため、全国の諸大名は原野の開墾を積極的に行い米の増産に力を入れました。また戦の無い平和な時代が続いたこともあるでしょう。秋田藩の新田開発は、1671 (寛文11) 年までに10万石以上 (玄米1万5千石以上の生産力) の新田開発が行われました。佐竹氏が常陸国 (茨城県) から秋田に移されて70年後のことです。

このような時代背景もあり、太田でも大規模な原野の開墾が計画されましたが、これを実現させるためには土地を潤す豊富な農業用水を必要としました。そこで秋田藩と太田地域の村々、そして近隣の村々は年中涸れることない玉川 (仙北市白岩広久内地区) から扇状地を横切り斉内川までの延長約10kmの用水路をつくります。

そして太田地域の村々ではこの用水路を利用して、上堰・下堰・御堰をつくり原野の開墾に乗り出すのです。

上堰



現在の上堰 (写真白丸内)、斉内川に落ちてサイフォン式で左岸の水路に出る。

下堰

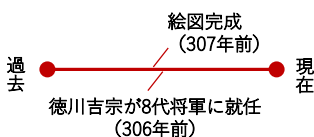
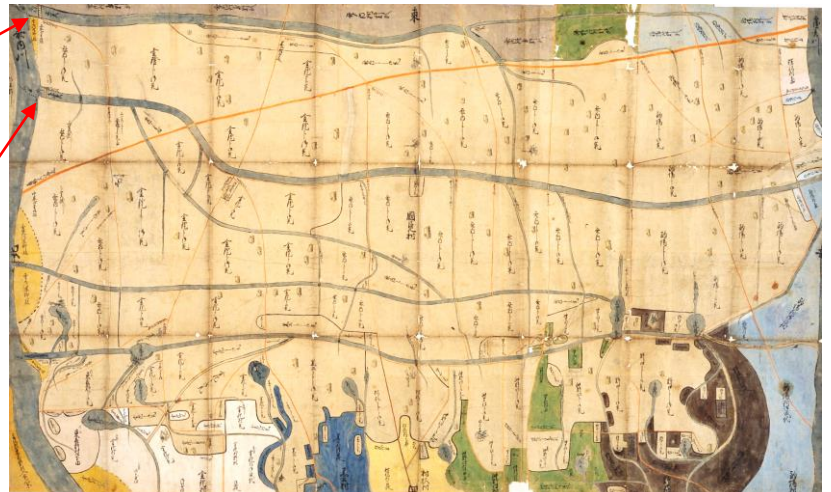


写真4 正徳5年 国見村絵図 (市指定文化財)  
作成年: 1715年、寸法: タテ116.5×ヨコ195 (cm)、個人蔵  
〔大仙市太田近世・近代絵図集〕2007年から

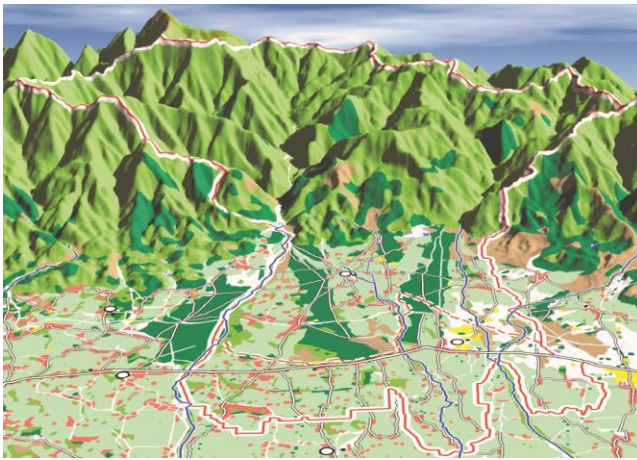


図3 1920年代の土地利用図

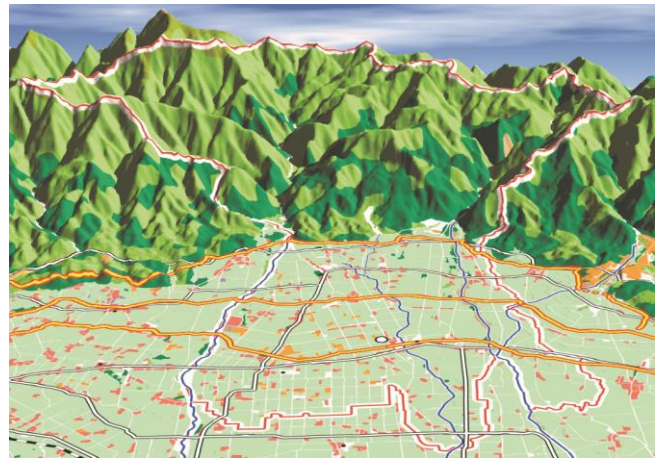


図4 2020年代の土地利用図 (制作：(株)ラング)

図3は1920年代の土地利用図です。平野部の濃い緑色は林を、茶色は原野を示しています。図4は現在の土地利用図です。図3に見られる林・原野は水田に変わったことがわかります。赤い縁取りの黄色の横線は上から第二田沢・田沢疏水（御堰）・仙北平野一号幹線用水路（上堰）を示しています。



上堰・下堰・御堰のおかげで原野が美田に生まれ変わったんだよ。

上堰・下堰は国見村の原野を開墾するためにつくられた堰です。国見村は江戸時代の新しい村で農業用水として利用できる沢水や湧水の確保が難しく、合わせて土地は水の保ちがよくない地質であり稲作をするためには豊富な用水を必要としました。そこで大曲高畑村の富樫刑部左衛門は、1678（延宝6）年に国見村の開墾のため齊内川から窪関川までの用水路、上堰をつくりました。さらに米沢村（豊川地区）の草薨理左衛門は、上堰の用水だけでは不足として1684（貞享元）年に下堰を完成させます。この後、国見村は米の生産高も向上し戸数も増えたことから、1776（安永5）年に国見上堰村と国見下堰村に分村します。現在、上堰は仙北平野一号幹線用水路としていかされ大仙市・仙北市・美郷町にわたる1万haの水田を潤しています。

御堰は、1824（文政7）年に秋田藩が六郷村の資産家達に呼び掛けて計画し、東山沿いの原野3千haの開墾を目指します。全面通水は1830（文政13）年5月で、さらに翌（天保2）年には堰幅を広げ延長27km余りに達して200haの開墾に成功します。その後、御堰が横断する小河川の洪水により堰は壊され修復が何度か試みられますが、1878（明治11）年の大洪水により御堰はその役目を終えます。

そして、御堰跡は国営による田沢疏水開拓建設事業に受け継がれます。その目的は日中戦争下での統制経済による食糧増産にありました。工事期間は1937（昭和12）年から1951（昭和26）年までと太平洋戦争をまたいで行われました。田沢疏水により2531haの原野が開墾され、太田地域では750haが水田となりました。

さらに戦後になり食糧増産と農家の自立を進めるため、東山の裾野に広がる原野1千haを開墾しようと第二田沢開拓事業が1963（昭和38）年に着工します。この事業により997haの原野が開墾され、太田地域では340haが水田となりました。

このように江戸時代以来400年にわたる祖先達の努力と平和の上に、いまの太田の美田が築かれたと言えます。



写真5 惣行地区（第二田沢整備前）  
左手：川口川



写真6 惣行地区（第二田沢整備後）



写真7 ほ場整備前の国見地区桜後付近

## あとがき

このパンフレットでは、私達の祖先は誰か？太田の地に数千年にわたり人びとが住み続けた理由とは何かということについて“人びとの営み”から考えてきました。太田に暮らした祖先達は、豊かな自然を利用して衣食住を整え、さらに原野を開墾して県内有数の美田を作り上げました。この豊かな暮らしを土台にして太田の歴史と文化が紡がれたと言えましょう。

豊かな暮らしとはどういうことなのか。農学者・農業経済学者で東京農業大学初代学長であった横井時敬は「土に立つ者は倒れず。土に生きる者は飢えず。土を護る者は減びず。」との言葉を残しました。また宮崎駿監督は『天空の城ラピュタ』でヒロインのシータに「土に根を下ろし、風とともに生きよう。種とともに冬をこえ、鳥とともに春を歌おう。」と語らせています。

太田には祖先達から受け継いだ豊かな自然と美田が残されています。どうか子供達には、自分達が世界でも恵まれた環境の中で豊かに暮らしていることを、忘れないでいてほしいものです。



文化財から太田の歴史と文化を考えよう。

太田地域には秋田県指定文化財2件、市指定文化財36件があります。いずれの文化財も地域の歴史と文化を正しく伝え、将来の文化の向上発展のために特に貴重なものとして指定されています。

太田の文化財は、数千年数百年にわたり祖先達が大切に伝えてきたものです。私達も祖先達の思いを受け継いで、太田の文化財を次の世代に伝えていきましょう。



県指定有形文化財  
「鈴木空如筆法隆寺金堂壁画模写及び下絵」6号壁部分（観音菩薩像）

太田の文化財について→



鈴木空如について→



市指定天然記念物  
「オプ山の杉群落」  
樹齢1千年以上、幹回り  
15.2m、県内1位。



市指定史跡「戊辰戦争の史跡」  
旧江戸幕府軍と明治新政府軍の戦いは国見にもあった。シダレザクラは戦没者の家族が植えたもので樹齢は150年を超える。



県指定無形民俗文化財「国見ささら」  
ささらは佐竹氏が秋田に伝えた芸能である。佐竹氏が常陸国から秋田に入る際に先導役を務めたと伝えられている。

### 参考文献

- 『太田町史』（通史編、地誌・年表編）2007年
- 太田町史写真集 | 『望郷写真館 笑顔の人びと』2005年
- 太田町史資料編別冊『大仙市太田 近世・近代絵図集』2007年
- 藤本強『日本列島の三つの文化』同成社、2009年

編著者 大仙市教育委員会 太田公民館  
協力 倉田陽一（市文化財保護審議委員）  
細川良隆（市生涯学習奨励員）  
発行 大仙市役所太田支所地域活性化推進室  
発行日 令和4（2022）年2月